

3月に入って、オホーツク地域にも徐々に春の兆しが見えてきましたが、3月2日に札幌気象台から「冬（2014年12月～2015年2月）の天候」が発表されました。この冬の網走の気温は「かなり高く（平年比+1.5℃）」、降水量（降雪量）は「かなり多く（同170%）」、日照時間は「少ない（同93%）」となっています。北海道ではこの冬、毎週のように本州の太平洋側を北上する低気圧が、日本海側から移動してくる低気圧と1つに纏まり、オホーツク海で台風並みに発達し停滞しました。その都度、網走近郊では道路の通行止めやJRの運休、市内の路線バスやタクシーの営業が止まるなど市民生活に大きな影響が出ました。

▼また、オホーツク沿岸の漁場環境に影響を及ぼす流氷については、例年1～2月は海氷域が拡大する時期ですが、今期は海氷域の拡大ペースが遅いばかりでなく、2月に海氷域面積の減少がみられました。そのため、オホーツク海の海氷域面積は2月10日以降、この時期としては1971年の統計開始以来最小で推移しています。海氷域面積が2月に減少した要因としては、2月中旬に千島近海に低気圧が停滞し、オホーツク海に暖かい東よりの風が入りやすく、海水が西に吹き寄せられたことと、海氷が融解したことが挙げられています（2/19気象庁報道発表資料）。この冬の非常に発達した低気圧の度重なる来襲やオホーツク海での海氷域面積の観測極値（統計開始以来の最高・最低値）更新はIPCC報告書で予測されている「地球温暖化の影響」の一端かも知れません。

▼さて、オホーツク沿岸では海明けとともにけがにかご漁業が開始されます。今年のオホーツク海海域におけるけがにかご漁業の許容漁獲量は昨年と同様の1,300トンとされ、その半分(650トン)がオホーツク総合振興局管内に配分されます。この許容漁獲量設定の基礎資料を得るために稚内および網走水産試験場が実施した平成26年のオホーツク海域におけるケガニ資源密度調査の結果によると、同海域全体の甲長8cm以上の雄（獲り残し群）の資源量指数は前年の1.1倍に増加したものの、甲長7cm台の雄（新規加入群）および甲長7cm未満の雄（来年以降の漁獲対象群）はいずれも前年の0.5倍および0.4倍に減少しています。今年の漁獲対象資源（甲長7cm以上の雄）でみると資源量指数は前年の0.94倍で、その水準は「中水準」と考えられますが、新規加入群や来年以降に漁獲対象となる群は減少していることから、今後の資源動向には注意が必要です。なお、調査結果の詳細は下記URLをご覧ください。

<http://www.fishexp.hro.or.jp/cont/abashiri/section/zoushoku/mf7eo1000000ha8.html>

▼オホーツク海でのケガニ漁獲量は全道の約半分を占めて、重要な漁業資源であると同時に、北海道の「食」の観光資源としても欠かせない存在です。道内を始め国内の消費市場へのケガニの供給構造は、昨年から実施されているロシア産活ガニの通関手続きの厳格化に伴って変化し、今後、オホーツク海産ケガニの重要性はさらに高まるものと考えられます。オホーツク沿岸の貴重な漁業資源を持続的に利用し、消費市場に安定的に供給するため、水産試験場では今後もケガニ資源のモニタリングと的確な評価を継続していきます。